

第XI部

否定(4) 否定諸題

否定の基本についてはすでに述べた。ここでは、否定に関するいくつかの話題を扱う。

第33章では、構造の一部訂正を要求する否定「～んじゃない」について考え、この形式を使用する際の原則を導き出す。

第34章では、否定属性に直接関わる(程度を表す)客体について考える。

「全然・絶対・完全」の3つのタイプの構造を示し、さらに否定属性に関わることのない「はっきり・かすか」の2つのタイプの構造にも触れる。

第35章では、数量を表す実体と否定の関係について考えてから、「～しか～ない」「～しはしない」「～することはない」の構造についても考える。

第33章

構造の一部訂正を要求する否定 「～んじゃない」

33.1 推断文への一部訂正要求

こんなやりとりがある。

- ①A：きょうは彼、いい時計してるだろ。
- ②B：そうだね。
- ③A：彼、きのう新宿へ買い物に行ってね。
- ④B：ああ、それで。
- ⑤A：あつ、ちがう、ちがう。_____。

Aさんは下線部で何と言おうとしているのだろうか。可能性としては、いくつか考えられる。

あの時計は新宿で買ったんじゃない。

あの時計は買ったんじゃない。

あの時計は新宿じゃない。

あの時計はきのう買ったんじゃない。

あの時計は彼が買ったんじゃない。

Aさんは下線部で何をしようとしたのだろうか。

Bさんは会話の流れから、④で、「彼はきのう新宿で時計を買った」という判断を行ったはずである。このとき、Bさんは状況から推測して一つの判断の構造を構築したわけである。

Bさんがここで行ったこのような推測による判断を「推断」と呼ぶ。そし

て、それを文にしたものを「推断文」と呼ぶ。

実は、AさんはBさんが④で推断文を作ったのを察して、⑤でBさんのその推断文は正しくないのだということをBさんに伝えたいと思ったのである。

単に正しくないということを伝えるだけなら、

⑤A：あっ、ちがう、ちがう。そうじゃない。

とでも言うだろう。

しかし、いま、AさんはBさんの作ったであろう推断文のどこが正しくないのかをも伝えたいと思うのだったらどうだろう。その場合は、Aさんは⑤の下線部で、Bさんにその推断文の特定の一部分に訂正を加えることを要求する表現をとることになる。

仮にいま、Aさんは「時計は買ったのではない。(もらったのだ)」というふうに訂正を要求しようとしているものとしよう。その場合、もし、

時計を買ったんじゃない。

と言ったとすれば、Aさんは目的を達することができない。これでは「時計」を訂正してもらう要求になってしまふからである。

時計を買ったんじゃない。(→電子手帳を買ったんだ。)

では、どうすればよいのだろうか。何か規則があるのだろうか。どのようにすれば正確な訂正要求ができるのだろうか。それを明らかにするために、その描写法について検討してみたい。

33.2 一部訂正要求をするための手続き

推断を表す構造を「推断構造」と呼ぶことにすれば、推断文「彼が新宿で時計を買った。」の推断構造は図33-1, -2 のとおりである。

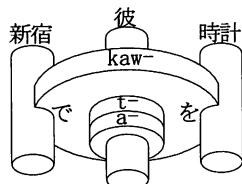


図33-1 彼が新宿で時計を買った

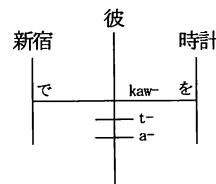


図33-2

相手のもつこの推断構造の一部に訂正を加えてもらうための手続きとして、話者はまずこの推断構造を包含実体「の」の中に組み入れ(図33-3)，そのうえで「～でない」の構造の「で格」にこれを置き，全体で「～のではない」の構造にする(図33-4)。(同じく包含実体である「わけ」の中に組み入れれば，「～わけではない」になる。)

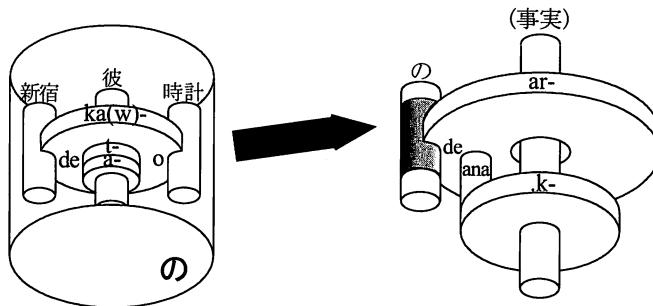


図33-3 [彼が新宿で時計を買った] の

図33-4 ～のではない

すると，ここに

[彼が新宿で時計を買った] のではない。

という「～のではない」文ができあがる。

この「～のではない」構造では，主体は特に何と特定できない。しいて言えば，それは「事実」とでもいうことになるだろう。

(事実は) [彼が新宿で時計を買った] のではない。

包含客体「の」は「は」によって対比客語，つまり否定の原因要素になっている(28-③)ので，これを別の客体にすれば，否定属性 -(a) na. k- がはずれて，全体が肯定構造になる可能性がある。

別の客体にするということは，たとえば包含客体「の」内的一部を換える(新宿→渋谷)ことによっても実現する。

(事実は) [彼が渋谷で時計を買った] のである。

「～のではない」は口語では「～んじゃない」となるので，以後「～んじゃない」の形を使用することにする。(「～わけではない」の場合は「～わけじゃない」になる。)

33.3 何が訂正要求の対象となるか

この推断構造には訂正要求の対象となる可能性のある要素が4つある。

主 体：「彼」

客 体：「新宿」「時計」

動属性：「買った」

これらのうちの1つを訂正要求するわけであるが、これらの要素の間には取り換えやすさの違いがある。主体「彼」を選択主語「彼が」にして、

彼が新宿で時計を買ったんじゃない。

と言うとき、最も取り換えやすいのは選択主語である「彼が」である。

→ 彼女が新宿で時計を買ったんだ。

そして、これが文頭語という条件からでないことは、次のように選択主語の位置を置き換えてみればわかる(ここでの「が」は事象主語の「が」ではない)。やはり、最も自然なのは選択主語の取り換えである。

新宿で彼が時計を買ったんじゃない。

時計を彼が新宿で買ったんじゃない。

他の要素に優先して、選択主語が訂正の対象となる傾向がある。

ここに見られるような取り換えやすさを「可換性」と呼ぶことにする。そして可換性の高さを点数で表すことにしてみる。すると次のような点数づけが(経験値として)一応妥当でありそうだということになる。

選択主語……4

句・節……3

客語……3

述語……2

主題語・話題語……0

卓立が置かれると……+1.5

選択主語は最も換えやすいので4点。句・節(事象主語・論理客語を含む)と客語はともに3点。述語は換えにくいので2点。主題語・話題語はまさにそれについて述べようとする要素だから換えることができないので0点。卓

立が置かれた語は可換性が高まるのでプラス1.5点。

「～んじゃない」文中のそれぞれの要素に点数をつけてみて、最も点数の高いものが訂正の対象となる。(卓立は太字で示すこととする。)

たとえば、

彼は 新宿で 時計を 買った んじやない。
 0 3 3+1.5 2

という文では、最高点4点のついた「時計」が訂正の対象となる。また、

新宿では 彼、 時計、 買った んじやない。
 0 0 0 2

という文では、「新宿」は主題であり、「彼」「時計」は話題である。必然的に訂正対象は「買った」になる(→「拾った」)。

それでは、何が訂正要求の対象となるのかについて、原則の形で取り上げてみることにする。可換性の点数の並びは〔 〕に入れて文の前に置く。

原則1 推断構造内の1要素だけを描写すれば、それが訂正の対象となる。

(動属性の描写がないときは「～んじゃない」ではなく、「～じやない」になる。)

[4] 彼じやない。 (→彼女じやない。) 図33-5

[3] 新宿(で)じやない。 (→渋谷(で)じやない。) 図33-6

[3] 時計(を)じやない。 (→靴(を)じやない。)

[2] 買ったんじやない。 (→拾ったのんじやない。) 図33-7

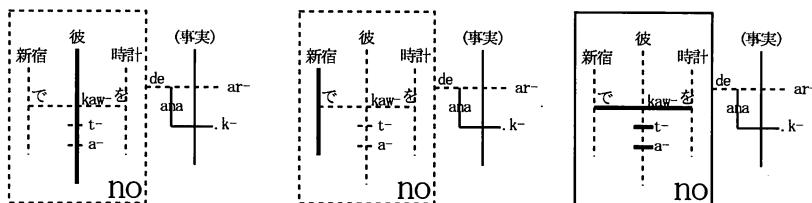


図33-5 彼じやない 図33-6 新宿(で)じやない 図33-7 買ったんじやない

構造図示においては、ことばに描写される要素を実線で示す。特に訂正の対象となる要素は太線で示す。描写されない要素は点線で示す。「～んではない」の「は」のふちどり表示は省略する。

原則2 原則1の1要素に動属性(2点)の描写を加えても、その1要素は訂正の対象のままである。

[42] 彼が買ったんじゃない。 (→彼女が買った。) 図33-8

[32] 新宿で買ったんじゃない。 (→渋谷で買った。) 図33-9

[32] 時計(を)買ったんじゃない。 (→靴を買った。) 図33-10

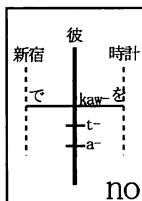


図33-8

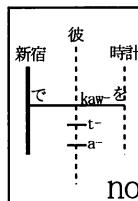


図33-9

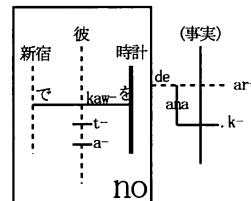


図33-10

原則3 主題、話題は訂正の対象にならない(0点)。したがって、原則1、原則2の文に主題、話題を加えても、その1要素は訂正の対象のままである。

[03] 時計(は)、新宿(で)じゃない。 (→渋谷)

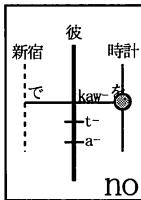
[042] 時計(は)、彼が買ったんじゃない。 (→彼女) 図33-11

[032] 彼(は)、時計(を)買ったんじゃない。 (→靴) 図33-12

[0032] 新宿では(は)、彼(は)、時計(を)買ったんじゃない。 (→靴)

[02] 新宿では(は)、買ったんじゃない。 (→拾った)

[002] 彼(は)、時計(は)、買ったんじゃない。 (→拾った) 図33-13



時計は彼が買ったんじや～

図33-11

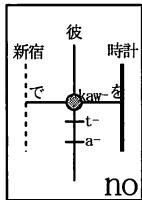


図33-12

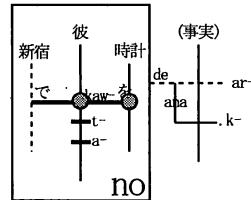


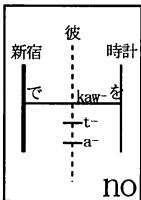
図33-13

原則4 主語が描写されていない場合、あるいは主語が主題、話題になっている場合は、卓立(+1)のある要素が訂正の対象である。ただし、述語が訂正の対象となる場合は、何か〇点のものを置いて、述語を引き立てる必要がある。

[3+1.5, 32] 新宿で時計(を)買ったんじやない。 (→渋谷) 図33-14

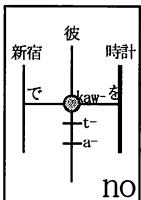
[03, 3+1.5, 2] 彼(は)、新宿で時計(を)買ったんじやない。 (→靴) 図33-15

[033, 2+1.5] 彼(は)、新宿で時計(を)買ったんじやない。
(→拾った) 図33-16



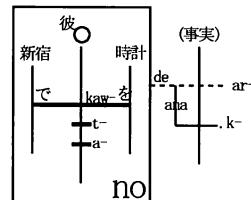
新宿で時計を～

図33-14



彼は新宿で時計(を)～

図33-15



彼、～買った～

図33-16

原則5 選択主語があれば、選択主語が訂正の対象である。

[4332] 彼が新宿で時計を買ったんじやない。 (→彼女) 図33-17

[0342] 時計は新宿で彼が買ったんじやない。 (→彼女) 図33-18

[3431] 新宿で彼が時計を買ったんじやない。 (→彼女) 図33-17

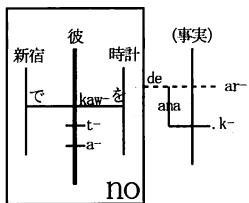


図33-17 彼が～

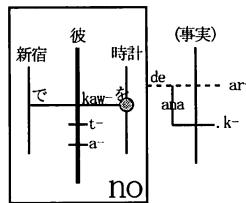


図33-18 時計は彼が～

原則 6 構造の要素になっている一部の実体同士や実体と属性の結びつきをひとまとめの描写単位(句)として扱いつつ、原則1～5に従う場合もある。

下には属性を含む事象主語の場合と論理客語の場合の例を取り上げる。属性を含まない単位描写(句)というのは、たとえば「彼の時計・白い時計・新宿(で)の時計」のようなものである。

事象主語の場合……新宿で時計を[彼が買った]んじゃない。

原則 1 [3] [彼が買った]んじゃない。(→彼女が拾った)

原則 2 (この場合、すでに原則1に動属性の描写が含まれている)

原則 3 [03] 時計は[彼が買った]んじゃない。(→彼女が拾った) 図33-19

原則 4 (この場合、主語は事象主語としてすでに出てる)

原則 5 (この場合、主語は単独で扱えない)

論理客語の場合……彼は新宿で[時計を買った]んじゃない。

原則 1 [3] [時計を買った]んじゃない。(→映画を見た)

原則 2 (この場合、すでに原則1に動属性の描写が含まれている)

原則 3 [03] 新宿では[時計を買った]んじゃない。(→映画を見た)

原則 4 [033+1.5] 彼、新宿で[時計を買った]んじゃない。

(→映画を見た) 図33-20

原則 5 [433] 彼が新宿で[時計を買った]んじゃない。(→彼女が買った)

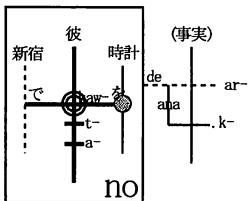


図33-19 時計は[彼が買った]～

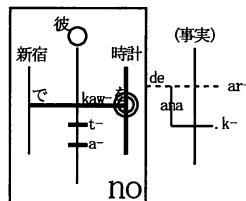


図33-20 彼、新宿で[時計を買った]～

原則 7 推断構造が否定構造であり、属性が訂正の対象となっている場合、要求される訂正是動属性を別のものに取り換えることではなく、否定属性 -(a) na. k- を外して肯定にすることである。

彼、新宿で時計を 買わなかつた んじやない。 [033, 2+1. 5]

彼、新宿で時計を kaw-[ana. k-θ=ar-] i=t-θ=a-θ んじやない。 図33-21

→ 彼、新宿で時計を kaw-[] i=t-θ=a-θ んだ。 図33-22

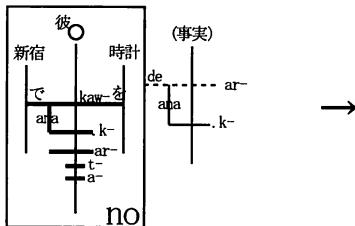


図33-21 ～買わなかつたんじやない

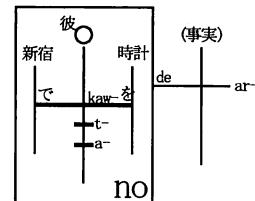


図33-22 ～買ったんだ

33.4 では、どうすればよいか

原則は以上のとおりである。

さて、先ほどの 33.1 の Aさんが、

時計を買ったんじやない。

と言った際に、「時計」を訂正してもらう要求になってしまったのは、原則(1と)2のためで、[32]になっていたのである。

また、この形では「時計を買った」全体の訂正要求になる可能性のあるこ

とも原則6からわかる。([3]→パソコンを修理に出したんだ。)

Aさんは「買った」を訂正してもらいたいのだから、原則1に従って単に
[2] 買ったんじゃない。

と言えばよかつたのである。もし「時計」という語も入れたいのであれば、
原則3から、「時計」を主題か話題にして入れればよいのである。

[02] 時計は買ったんじゃない。

[02] 時計、買ったんじゃない。

また、どうしても「時計を」というふうに言いたいのであれば、原則4から、何か主題か話題を入れて、「買った」に卓立を置けばよいのである。

[03, 2+1.5] 彼は時計を買ったんじゃない。

[03, 2+1.5] 彼、時計を買ったんじゃない。

[03, 2+1.5] 新宿では時計を買ったんじゃない。

神への愛（格の代用）

「神への愛」の構造を考えようすると問題にぶつかる。元の構造は「私①は神を愛する」であり、「神へ愛する」ではないからである。（「愛する」の構造は「愛(を)する」の形の「格を描写しない併合」である。A17.2⑫）日本語の経済性の原理には重要な格は表層にできるだけ描写しない（必要ない）という原則があり、「神^がの愛」「ワイン^をは飲む」「そこ^ぞのペン」のようになる。それで「神を愛(を)する」の2実体「神」と「愛」をノでつなぐ（36.1）と「神^をの愛」となり、形の上では「神^がの愛」と同じになってしまふ。そこで「ノつなぎ」で描写の許される、方向を表す格詞「へ」を代用し、「神への愛」として意味の混乱を防ぐことになる。構造も「神へ愛を寄せる」になる。

「ノつなぎ」だけに生じる「格の代用」（構造の代用）である。

第34章

否定属性に直接関わる客体

34.1 否定属性に直接関わる客体……全然

程度を表す「全然」という実詞がある。この実詞は

彼の酒は全然₀₂飲まない。

のように、必ず否定で用いられる。肯定で用いて、

*彼の酒は全然₀₁飲む。

と言うことはない。(俗語的な言い方については今は考えない。)

同じく実詞である「酒」は、構造上では客体として動属性に関わるが、この実詞「全然」はそうではなく、否定属性 -(a) na. k- の方に関わっている(図34-1, -2)。ただ、否定構造はそれだけでは構造上に存在できないから(26. 3⑤)、否定属性に関わるということは「動属性+否定属性」(nom-ana. k-) 全体に関わることを意味する。

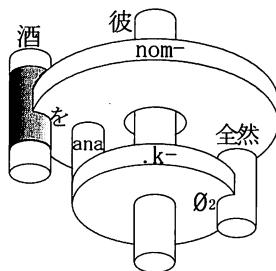


図34-1 彼、酒は全然飲まない

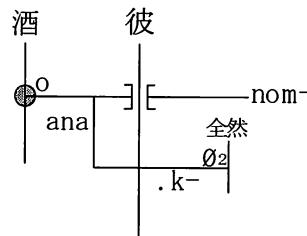


図34-2

「全然」という実体は、構造においては否定構造と直接関わる客体となる。このような、実体が否定構造と直接の関わりをもつことを「ナイ関わり否定」(図34-1, -2)と呼ぶことにする。

34.2 否定属性に直接関わる場合もある客体(1)……絶対

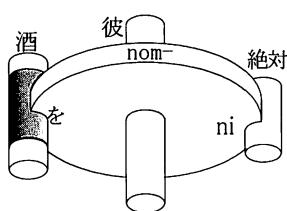
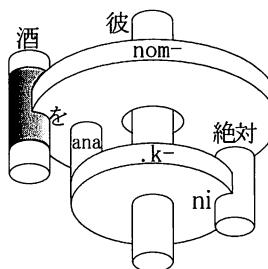
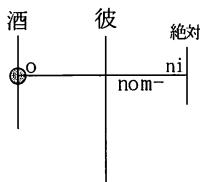
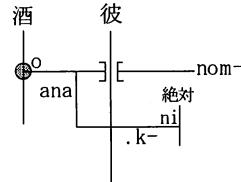
「絶対」という実詞は「全然」とは若干異なっている。動属性にも関わることができるからである。

彼の酒は絶対に飲む。

という場合の構造では「絶対」が動属性に関わっており(図34-3, -5),

彼の酒は絶対に飲まない。

という場合の構造では「絶対」が否定属性 -(a) na, k- に関わっている……ナイ関わり否定(図34-4, -6)。

図34-3 絶対 \emptyset に飲む図34-4 絶対 \emptyset に飲まない図34-5 絶対 \emptyset に飲む図34-6 絶対 \emptyset に飲まない

ただし、動属性に関わるのは否定の場合ではなく肯定の場合である。

34.3 否定属性に直接関わる場合もある客体(2)……完全

「完全」という実詞は「絶対」同様、動属性・否定属性のいずれにも関わることができる。

それが完全にわかる。(図34-7)

それが完全にわからない。(=全然わからない 図34-8)

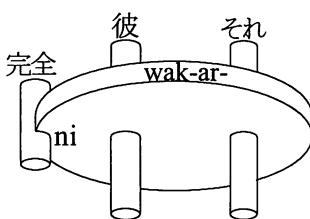


図34-7 完全にわかる

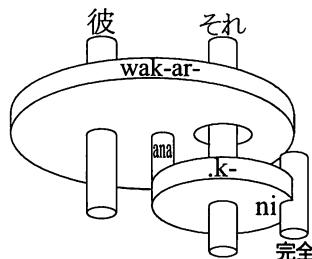


図34-8 完全にわからない

(「わかる」の2つの主体が複主体であることは 12.3参照)

しかし、動属性に関わったまま否定できる、という点で「絶対」とは異なっている。特に「完全」という客体に「は」を与えて対比客語(28-③)にすればこのことがよくわかる。

それが完全にはわからない。(=80%わかる 図34-9)

これは、ニュアンスとして、対比すべき構造のあることを暗示している。それはたとえば、次のような、客体を対比相手の「不完全」にした、肯定構造である(28-③)。

それが不完全にわかる。

確かにこれは図34-9の構造の意味するところである。

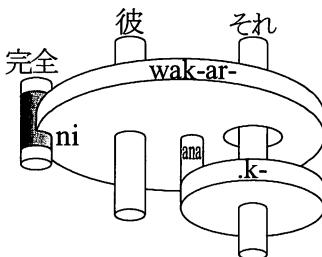


図34-9 完全にはわからない

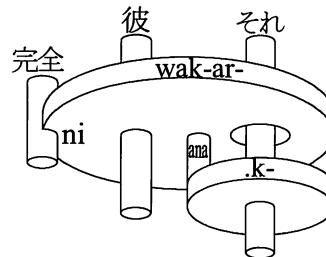


図34-10 完全にわからない

ところで、「完全」を対比客語にしないで(つまり「は」を付加しないで),
論理客語(28-④)のままで描写すると,

それが完全にわからない。

となる(図34-10)。これは図34-8の構造から描写される文と同じなので二義的な文となる。しかし、図34-10の構造の描写文であることは「まだ」をつけたり、その気になって努力したりすれば確認できる。

この「完全」の場合(図34-10)のように、動属性に関わったまま否定属性と共存することを「属性関わり否定」と呼ぶことにする。

否定に関しては、「全然」と「絶対」が否定属性-(a)na.k-に直接関わる「ナイ関わり否定」の客体であるのに対し、「完全」は「ナイ関わり否定」の客体であるばかりでなく、動属性に関わりながら否定属性と共存できる「属性関わり否定」の客体でもある(表34-1参照)。

34.4 否定属性に直接関わることのない客体……はっきり、かすか

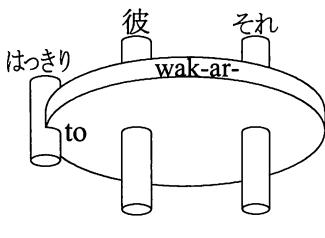


図34-11 はっきりわかる

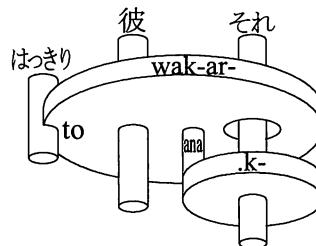


図34-12 はっきりわからない

「はっきり」という実体は動属性に関わるので、

それがはっきり0とわかる。

という文の構造は図34-11のようになっている。そして、これを否定にすると、図34-12のようになる(属性関わり否定)。「はっきり」は否定属性に直接関わることはない。

同じく「かすか」という実体も

それがかすかに見える。

というように、動属性に関わる(図34-13)のであるが、この「かすか」は否定属性とは共存できないので、図34-12のような構造をもたない。

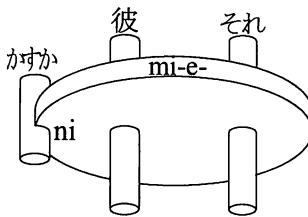


図34-13 かすかに見える

(「見える」の2つの主体が複主体であることは12.4.1②参照)

以上、この章で扱った実体を整理して表にすると表34-1のようになる。

表34-1

		全然	絶対	完全	はつきり	かすか	
動属性に	肯定	×	○	○	○	○	
	否定	×	×	○	○	×	属性関わり否定
否定属性に関わる		○	○	○	×	×	ナイ関わり否定

否定属性に直接関わることのできる(ナイ関わり否定の)客体は「全然・絶対・完全」の3タイプの客体である。

表から明らかなように「完全」のタイプに問題がある。話者が動属性に関わっての否定(属性関わり否定)のつもりで「完全に」を使用して

完全にわからない。(80%はわかっている。図34-10)

と発話をしたとしても、聞き手がその「完全に」を否定属性に直接関わるもの(ナイ関わり否定)として構造を再構成してしまう恐れがあるからである。

完全にわからない。(全然わからない。図34-8)

第35章

諸題

35.1 数量実詞と否定

1) いったい来たのか、来なかつたのか

このような文がある。

学生は8人来ることになっていましたが、全員来ませんでした。

この文から知ることのできる状況は次のようなものである。

- ・学生は1人も来なかつた。
- ・学生は來たが、8人未満である。

学生はいったい來たのか、來なかつたのか。この二義を有する文からだけでは決定できない。なぜこのようなことになるのだろうか。

2) 単一体としての扱い、集合体としての扱い

「全員」をひとまとめのセット、つまり単一体として扱うと

全員 \neq 來ない。

というのは「全員というものが來ない」「1人も來ない」の意味になる。

「全員」を1人ひとりからなる集合体として扱うと

全員 \neq 來ない。

というのは、来る人の数が100%であることの否定となり、たとえば「80%が來る」というようなニュアンスになる。

このように数量実詞(第38章参照)を否定する場合、その実詞を単一体として扱うか、集合体として扱うかで表現されたものの意味が異なってくる。

3) 構造図示

では、構造を見てみることにする。結果としては同じ否定構造になる(図35-2, -4)のだが、過程のあり方によって2つに区別することができる。

ここでは数量実体(数量を表す実体)として「全員」を例にとる。これは「8人」等、他の実体でも基本的に同じことになる。

また、数量実体が客格にある場合も基本は同じである(35.1.5))。

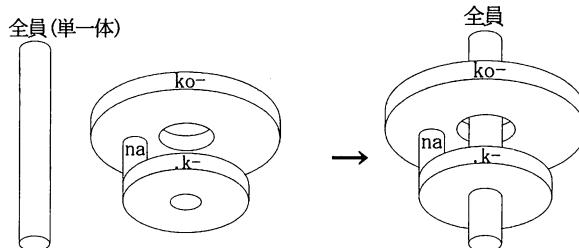
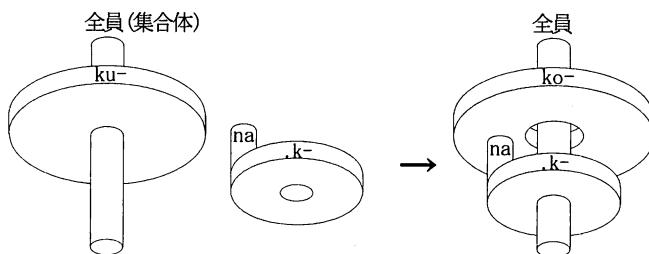
「单一体」扱いの「全員」

図35-1 全員 + 来ない

図35-2 全員の, 来ない
(1人も来ない)「集合体」扱いの「全員」図35-3 全員の, 来る
(100%来る)図35-4 全員の, 来ない
(来るのは100%ではなく例80%)

なお、たとえば次のような場合、「全員」は「学生」と同じ主格にある。

学生の, は全員の, 来ませんでした。

「全員」と「学生」は時差同位格である(38.2)。

4) 否定構造の描写

図35-2, -4 の構造を描写する際に、数量実体の置かれている主格をどう描写するかによっていくつかの表層形式が現れる。

「全員」は表35-1のように、4種類の主語の形式で、また、單一体としての扱い、集合体としての扱いとで、①～⑧の計8種類の描写が可能である。(否定における主語の6種類については 27.1参照。ここでは、事象対比主語は対比すべき事象が考えにくいために、また選択主語は否定属性が先に決定しているという限定性のために、それぞれ扱う必要がない。)

数量実体が「全員」の場合

表35-1

「全員」單一体			「全員」集合体
①	話題主語	全員の來なかった	⑤
②	主題主語	全員のは來なかった	⑥
③	対比主語	全員のは來なかった	⑦
④	事象主語	全員が來なかった	⑧

次に、①～⑧のそれぞれについて簡単にコメントしておく。

「單一体」扱いの「全員」……來た人はいない

- ① 全員の來なかった。それで、料理はそのままになっている。
- ② (その)全員のは來なかった。それで、料理はそのままになっている。
- ③ (その)全員のは來なかった。しかし、別のグループは來た。
- ④ 全員が來なかった。それで、料理はそのままになっている。

「集合体」扱いの「全員」……來た人もいる

- ⑤ 全員の來なかった。それでも、料理はほとんどなくなった。
- ⑥ 全員のは來なかった。(そんなに多くは來なかった。)
それでも、料理はほとんどなくなった。
- ⑦ 全員のは來なかった。(全員ではなくて)80人ぐらい來た。
- ⑧ 全員が來なかった(集まらなかった)。が、料理はほとんどなくなった。

ちなみに、数量実体が「8人」の場合についても触れておく。表35-2に見るように、8種類の主語の形式があることは「全体」の場合と同じである。構造図は省略するが、図35-1～-4の「全員」を「8人」に換えたものになる。

数量実体が「8人」の場合

表35-2

「8人」単一体			「8人」集合体
①	話題主語	8人 <small>の</small> 来なかつた	⑤
②	主題主語	8人 <small>の</small> は来なかつた	⑥
③	対比主語	8人 <small>の</small> は来なかつた	⑦
④	事象主語	8人が来なかつた	⑧

「单一体」扱いの「8人」……「8人」一括で否定(8人欠席)

- ① 8人の来なかつた。それで、出席者は100人のうち92人だった。
(出席予定者が8人なら、出席者なし。)
- ② (その) 8人のは来なかつた。で、出席者は100人のうち92人だった。
(出席予定者が8人なら、出席者なし。)
- ③ (その) 8人のは来なかつた。しかし、別のグループは來た。
- ④ 8人が來なかつた。それで、出席者は100人のうち92人だった。
(出席予定者が8人なら、出席者なし。)

「集合体」扱いの「8人」……「8人」だけの否定(1～7人出席)

- ⑤ 8人の来なかつた。(予定では8人……來たのは、たとえば5人。)
- ⑥ 8人のは來なかつた。(そんなに多くは來なかつた。)
- ⑦ 8人のは來なかつた。(8人ではなくて)5人だった。
- ⑧ 8人が來なかつた(集まらなかつた)。
(予定では8人……來たのは、たとえば5人。)

35.1 冒頭で「全員來ませんでした」が二義をもつことを指摘したが、以上のように、さらに「は」が関わることによって、8種類の「全員」「8人」のあり方があることが判明した。

5) 数量実体が客格にある場合

数量実体が客格にある場合についても簡単に触れておく。

彼のは学生全員に会わなかつた。

という例文の場合、「学生」と「全員」が時差同位格にあることは 38.2 で言及するが、ここでは「学生」を省略して考えやすくする。

まず構造は、主格の場合と同様、2通りある。

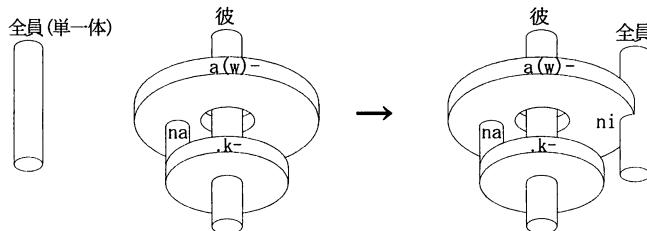
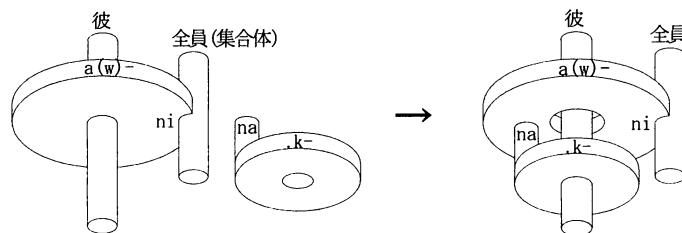
「单一体」扱いの「全員」

図35-5 全員 + 彼の,会わない

図35-6 全員に会わない
(1人にも会わない)「集合体」扱いの「全員」図35-7 全員に会う + ない
(100%に会う)図35-8 全員に会わない
(会うのは100%ではなく例80%)

この否定構造の描写についても主格の場合に準じて考えることができる。客格の場合も6種類の客語のあり方がある(28.1)が、やはり、事象対比客語と選択客語については扱う必要がない。

数量実体が「全員」の場合

表35-3

「全員」單一体			「全員」集合体
①	話題客語	全員 <small>を</small> 会わなかった	⑤
②	主題客語	全員には会わなかった	⑥
③	対比客語	全員には会わなかった	⑦
④	論理客語	全員に会わなかった	⑧

「單一体」扱いの「全員」……会った人はいない

- ① 全員を会わなかった。(会った人はいない。)
- ② (その)全員には会わなかった。(会った人はいない。)
- ③ (その)全員には会わなかった。(別のグループには会った。)
- ④ 全員に会わなかった。(会った人はいない。)

「集合体」扱いの「全員」……会った人もいる

- ⑤ 全員を会わなかった。(会った人もいる。)
- ⑥ 全員には会わなかった。(そんなに多くの人には会わなかった。)
- ⑦ 全員には会わなかった。(全員ではないが、たとえば80%に会った。)
- ⑧ 全員に会わなかった。(会った人もいる。)

「全員」を「8人」に換えた場合も、35.1.4)(表35-2)の主格の場合に準じて考えることができるが、それは省略する。

6) 全員来たんじゃない、全員来たわけじゃない

学生のは全員の来たんじやない。

学生のは8人の来たんじやない。

という形で数量を否定することもある。

この「へんじやない」は構造の一部訂正を要求する否定の形で、第33章で扱っている。「～わけじやない」もこれに準じて考えることができる。

数量実詞を否定する(訂正の対象とする)ためにはどうすればよいのか、第

33章で提示した原則に従って考えてみよう。ここで推断構造にあたるのは、

学生 θ_1 は全員 θ_1 来た

である。

原則1 (推断構造内の1要素だけを描写すれば、それが訂正の対象となる)に従えば、数量実詞だけを描写すれば、数量実詞が訂正の対象となる。(「全員」を訂正するよう要求する。)

全員じゃない。

原則2 (それに動属性の描写を加えても、それは訂正の対象のままである)に従って、「来た」をつけても、数量実詞が訂正の対象である。

全員が来たんじゃない。

原則3 (話題、主題は訂正の対象にならない)に従って「学生 θ_1 ・学生 θ_1 は」を文頭に置いても、数量実詞が訂正の対象である。

学生 θ_1 、全員が来たんじゃない。

学生 θ_1 は全員が来たんじゃない。

原則4 (同等の資格のものがある場合、卓立のあるものが訂正の対象である)に従って、数量実詞に卓立を置けば、数量実詞が訂正の対象である。

きのうここに全員が来たんじゃない。

学生 θ_1 はきのう全員がここに来たんじゃない。

原則5～7はここで扱う対象ではないので省略する。

以上、数量実詞を否定(訂正)の対象とするためにはどうすればよいのか、原則に従って確認した。

35.2 「～しか～ない」の構造

1) 実体排除描写

3.1で「相対化描写」を扱った。これは構造上有る実体を他の潜在的な実体と相対的に関連させて描写する描写法である。

3.1では②で「相対化描写2」(実体排除描写)に言及しており、その②-1では「他実体排除描写」を扱っている。「こそ・だけ・(一部の)さえ」がこの機能をもっている。

その描写法では、

彼こそ犯人である。(「彼こそが犯人である」も考えられる。)

彼さえ来れば、円く収まる。

彼さえ来なければ、円く収まる。(このように否定でも使用。)

のように「その属性に対する主体(客体)が、この判断構造に現れた主体(客体)だけであり、ほかにはない」ということを含意しつつ判断構造を描写する。構造は図35-9,-10のようなものである。

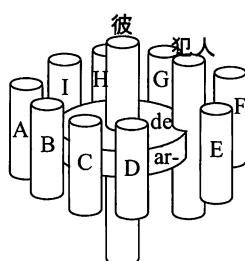


図35-9 彼こそ犯人である
(主体A～Iは排除される。)

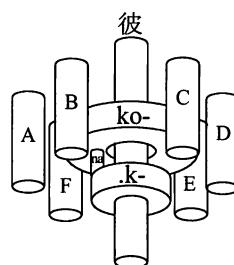


図35-10 彼さえ来なければ……
(主体A～Fは排除される。)

2) 「～しか～ない」の「しか」

「しか」は、「彼しか来ない。」のように必ず否定で用いられ、やはり他実体を排除するようにみえる。

では、「さえ」等と同じかというと、そうではない。

彼がさえ来なければ……

では、彼は「来ない」と仮定されるのであるが、

彼がしか来なければ……

では、彼は「来る」と仮定されている。したがって、「しか」の構造は図35-10のようなものではない、ということになる。図35-10では彼は「来ない」。

それでは、どんな構造をしているのだろうか。改めて検討してみると、

彼がしか来ない。

では「来ない」という属性をもっているのは「彼」自身ではなく「他実体」であることに気がつく。「彼」自身はこの「来ない」という属性をもっていない。つまり「来ない」という属性は「他実体」を排除しているのではなく、「彼」自身つまり「自実体」を排除している。

「しか」は、「他実体」を排除する「こそ・だけ・さえ(の一部)」とは対照的に、「自実体」を排除するのである。

3) 「自実体排除」の構造

彼がしか来ない。

において、「来ない」という属性をもつのは「彼」以外の全員であり、「彼」自身は「来る」という属性をもつのであるから、そのことが構造上に表現されるはずである。

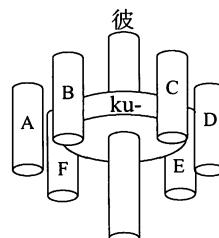
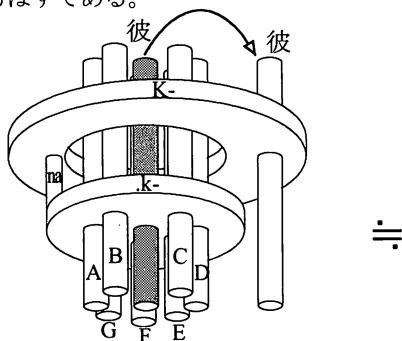


図35-11 彼がしか来ない
(A～Gは「来ない」。自実体「彼」だけ排除。)

図35-12 彼だけが来る
(他実体排除)

図35-11では「来ない」という属性をもっているのはA～Gの実体であって、「彼」はこの属性をもっていない。「彼」はこの主体群の中から抜け出る。実体を塗りつぶしてあるのは「抜け出る」ことを意味している。抜け出た後、単独で肯定主体となる。これが主格における「～しか～ない」の構造である。ここにできあがる構造(図35-11)は、意味の上では「彼だけが来る」の構造(図35-12)と、ニュアンスは別として、ほぼ等価である。

4) 客体の場合の構造

彼はマンガ巻しか読まない。

では、彼の読む客体は小説でもなく教科書でもなく新聞でもない。「マンガ」だけである。属性「読まない」の客体になるのは「マンガ」以外のすべてで、属性「読まない」は「マンガ」を排除している。自実体排除である。

構造図示においては、「マンガ」を含む実体の束を「読まない」の客格(を格)に置いて、「マンガ」に相当する実体を抜き出す。抜き出した後、その実体を「読む」の客格(を格)に置けばよい。

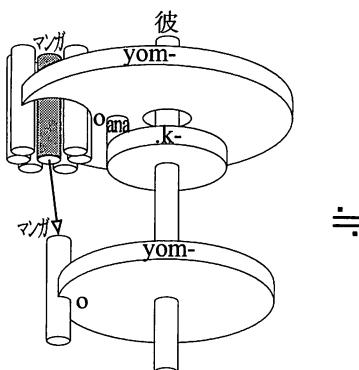


図35-13 マンガ巻しか読まない
(自実体排除)

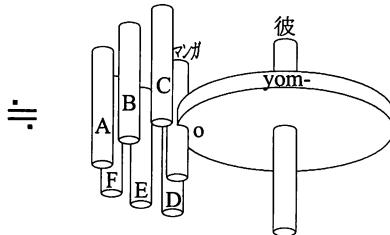


図35-14 マンガだけ巻読む
(他実体A～Fを排除)

ここにできあがった構造(図35-13)は、意味の上では、

「マンガだけ巻読む。」

の構造(図35-14)と、ニュアンスは別として、ほぼ等価である。

35.3 「降りはしない」の構造

「降る」の否定は「降らない」であり、この構造は第26章で扱っている。ここでは「降りはしない」という形の否定の構造を考えてみよう。

「降り」は動属性の実詞化したもの(9.2)，つまり名詞であり、「しない」は「する」の否定である。「降り」と「する」の関係を考えると、実体と動属性だから、両者は格関係にあるはずである。となれば、「落下をする」のように「降りをする」であるだろう(図35-15)。(ただし、肯定で用いるときは「降りのはする」のように相対化表示となる。)

これを否定にすれば、「降りをしない」となる。この「降り」を主題客語にする(「は」のふちどりを施して、「を」を省略する)ことによって、

降りをはしない

を得ることができる(図35-16)。

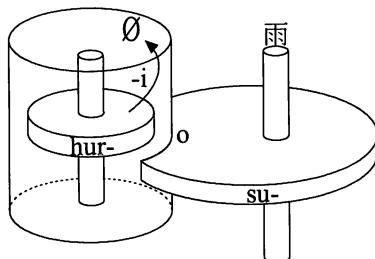


図35-15 降りをする

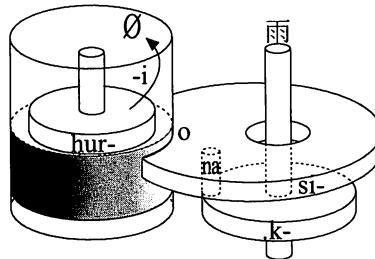


図35-16 降りはしない

「(雨は)降りはしない。」というのはこのような構造をもつものと考えることができる。

「降りもしない」は、相対化描写の「は」のふちどりを「も」の他実体随伴描写(3.1①)に換えれば得ることができる。その場合、意味的には非難を伴う否定となる。

35.4 「～することはない」の構造

包含実体に入れたうえでの否定(35.3)ということでは、

降ることのない

も同じである。構造は図35-17に示すようなものとなる。

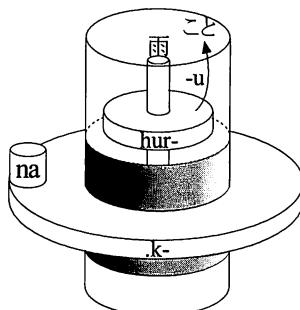


図35-17 雨が降ることはない

ちなみに言えば、

君が行くことはない。

というような文では「必要がない」という意味になっている。この文の構造は図35-18のように考えられ、構造には「必要」という実体が保たれている。この実体「必要」は描写されないが、聞き手は当然のこととしてこれを再現する。(初歩の日本語学習者の場合はこれができない。)

「君が行くこと」は本主体であり、「必要」は属性主体である(19.2)。

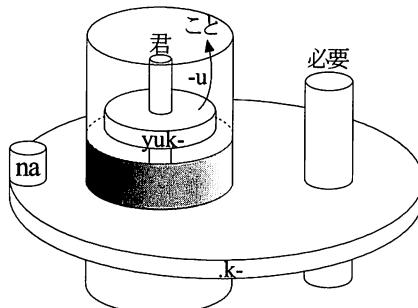


図35-18 君が行くことは(必要が)ない